

地 理 B

学習の成果が出始めた。知識を深め、さらに得点力を伸ばそう！

I. 全体講評

今回の第3回8月センター試験本番レベル模試の平均点は51.6点であり、前回4月の平均点43.0点を8.6点上回った。夏休みの学習を含むこれまでの努力が成果として表れ始めた。しかしながら、今年のセンター試験本試験の平均点67.99点とは、まだ16点以上の開きがある。今回得点が伸びた受験者も、学力の完成には至っていないことを自覚し、油断せずに学習を続けること。正答率の低い問題のほとんどが、より正確で深い知識を必要とする問題であった。センター試験本番までに残された時間はあと4か月程度であるが、試験本番を意識したセンター型問題集の演習と合わせ、教科書・図説資料集レベルの基礎知識の習得も継続して行ってほしい。地理の学習計画が確立していない受験者は、

Ⅲ. 学習アドバイスを参考にするとよい。

II. 大問別分析

第1問 世界の自然環境・自然災害と環境問題

自然現象や環境問題の分布をただ覚えるのではなく、そこに見られる理由を理解しよう！

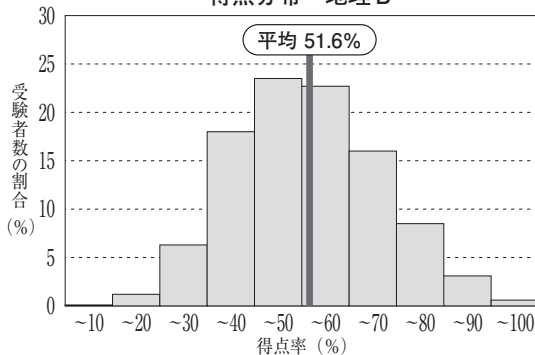
大問全体の平均得点率は50.6%であった。センター試験に必ず出題される自然地理分野の出来としてはやや物足りない。問3の正答率が39.0%と最も低かったが、バングラデシュのデルタ地帯の洪水に、ヒマラヤ南斜面で上昇気流となる夏の南西季節風が大きく影響していることを知らない受験者が意外と多かった。問4の正答率も39.8%と低かったが、モンスーンアジアのマングローブの消失やアマゾンの森林破壊の理由を、正確に理解できていない受験者が多かった。自然地理分野を学ぶ際は、地形、気候、災害、環境問題などの分布をただ覚えるのではなく、各々の地理的現象がなぜその場所に見られるのかを理解することが必要である。地理は暗記ではなく、理解の学問であると考えてもらいたい。

第2問 エネルギーと鉱工業

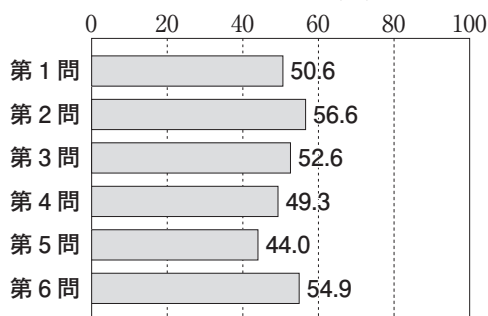
頻出分野で好結果が出た。このまま学習を積み重ね、得意分野に育てよう！

大問全体の平均得点率は56.6%であり、6つの大問中で最も高かった。エネルギーと鉱工業はセンター試験の頻出分野の一つであるが、良い結果が出たと言えよう。このまま得意分野に育て、得点源にしてもらいたい。正答率の極端に低い問題はなかったが、問3（正答率63.3%）の、誤答①の選択率が32.9%と高めであることが気になった。“目覚ましい経済成長”という語句に惑わされ、南アフリカ共和国に該当する①を中国のものだと判断したのだろうか、あまりに短絡的であるし、レアメタルに関する知識も不十分である。近年は、センター試験を含む各種の入試で、レアメタルの産地を問う問題が増えている。図説資料集やデータブックで、各種レアメタルの主要産出国を確認しておこう。

得点分布 地理 B



大問別得点率 (%)



第3問 生活文化と都市

必要不可欠な情報を読み落とすことの無いよう、選択肢や説明文を丁寧に読むこと。

大問全体の平均得点率は52.6%であり、この時期としては標準的な出来であったが、正答率の低さが気になる問題もみられた。例えば問6は、マニラに該当する説明文を、リオデジャネイロのものと判断してしまった受験者が全体の44.7%に達したこともあり、正答率が21.0%と落ち込んだ。スには、“プライメートシティ”の一語があり、これに注目できれば、該当する都市は国内で突出した人口規模を持つ首位都市であって、国内により大きな都市サンパウロがあるリオデジャネイロは該当しないと判断出来たはずである。問題を解く上で必要不可欠な情報を読み落とすことの無いよう、選択肢や説明文をいっそう丁寧に読みこむことが肝要である。問3は、ロヒンギヤに関する知識を必要とする時事問題であったが、これの出来も悪かった(正答率29.8%)。多忙な受験者であっても、世界が注目する時事的なことがらには関心を抱いてもらいたい。

第4問 オセアニア

地誌学習は後回しになりがちだが、教科書や資料集レベルの知識は早めに習得しよう。

大問全体の平均得点率は49.3%であり、6つの大問中で2番目に低かった。多くの高校が系統地理を終えてから地誌を扱うため、例年、地誌の学習は遅れがちになるが、2016年度よりセンター試験でも地誌の大問が1題から2題に増えるなど、その重要度は増している。できるだけ早めに地誌学習に取りかかり、教科書・図説資料集レベルの基礎知識は身につけた上で模試に臨んだ方が効果的である。最も出来の悪かった問6(正答率25.6%)で扱ったアボリジニーの人口と諸権利の回復、次に出来の悪かった問3(正答率36.0%)で扱ったニュージーランド南島の東岸と西岸の生業の違いは、ともに多くの図説資料集で丁寧に説明されている重要事項である。このレベルの問題を確実に正解できるレベルを目指していきたい。

第5問 イタリアと韓国・北朝鮮

主要な作物の原産地や主要国の宗教別人口構成は重要。早めに復習しておこう！

大問全体の平均得点率は44.0%であり、6つの大

問中で最も低かった。この時期、地誌の得点率が低くなるのはいつものことだが、第4問の講評でも述べたとおり、近年、地誌分野の重要度は高まっている。後回しにせず、早めに学習に取りかかること。最も正答率が低かったのは問4であるが、正答率20.7%を、誤答④の選択率48.0%が大きく上回ってしまった。トマトやトウガラシの原産地が中南米であることを知らない受験者や、韓国の宗教別人口構成をわかっていない受験者がかなり多かったということだ。主要作物の原産地や主要国の宗教別人口構成は重要である。図説資料集等を見て、速やかに復習しておくこと。

第6問 地域調査(群馬県)

地理的な技能・センスを試される地域調査の大問で好結果が出た。自信を持とう！

大問全体の平均得点率は54.9%であり、6つの大問中で2番目に高かった。地形図や統計グラフの読図能力、高校受験等で習得した日本地理の知識を活用して正解を推理する力、主題図の適切な表現方法を選択する力など、地理的な技能・センスを試される地域調査の大問でまずまずの結果が出た。センター試験の過去問やセンター型問題集で地域調査の大問の演習を積み重ねていけば、本番でも必ず好結果を得られるだろう。自信を持って学習を継続してもらいたい。

Ⅲ. 学習アドバイス**◆より正確で深い知識を身につけよう！**

今回の模試では、正確な理解とやや深い知識・認識を必要とする問題の正答率が低かった。センター試験は、「バングラデシュは水害が多い」という程度の浅薄な知識では通用しない。「バングラデシュは、ヒマラヤ南斜面で上昇気流になる南西モンスーンとサイクロンの影響で水害が多い」という程度の認識がしっかりできていないと高得点は望めない。しばらくは、自然、産業、都市、生活文化、地誌…のように、高校地理の全分野を網羅した問題集や穴埋めノートに取り組んで、理解の曖昧な箇所に出くわしたら、教科書、図説資料集、用語集等を精読して完全に理解するような学習に励んでもらいたい。“覚える”ことより、“わかる”ことを重視した学習を心がけたい。